

## 科学の正当性を疑う面白さ

文教大学人間科学部（障害福祉） 星野晴彦

とても面白かったです

とくに拒食症の方の国際比較から、自分たちが当たり前と思っている法則のようなものを根底から疑ってみるといのはとても素敵でした。

一見、科学的に裏付けられたようなものが私たちの意識を支配している。だが、よくよく調べてみると別の見方から見ることができる。そのような、社会からの考え方の支配という視点も、なるほどと思いました。

私は今、福祉現場の職員が、利用者を「かけがえのない存在として捉える」プロセスについて調査しています。すでにヒアリングした中で、「組織の方針に従って頑張ろうとする人」「組織はかなり効率性を求めるけれども、自分なりに利用者に寄り添いたいと思う人」「組織の効率性に何の疑問も抱かず、仕方がないとあきらめる人」「そもそもこの種の仕事が向いていないと認識する人」の4グループがいることがわかりました。

目下、どのようなプロセスで、そのような考え方になるかを探っています。

福祉の世界が、社会が捉えるように均質な職員で出来上がっているわけではないことが示されていると思いました。

なぜ、この経験を書くかと言えば、模擬インタビューに調査協力者が、「仕方がないと諦める人」が同僚に少なくないと回答をしていたからです。講師自身は、ここで間が開いてしまったのはインタビューの下手だったためなどと冷静におっしゃっていましたが、自分のインタビューをあれだけ冷静に分析しているところがすごいと思いました。

優れた職人芸のように感じました。

最後の質問にもありましたように、「科学的でなければならない」とトレーニングされてきた研究者には理解しがたいのが、質的研究であろうと思いました。

同時に、このような手法でなければ、たぶんこのような掘り起しはできないと思いますし、平均的な発想に疑問を抱くということもできなくなってしまうのだろうなと思いました。

とても参考になりました。ありがとうございました。